

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

二つの日本語論

著者	山中 桂一
著者別名	Keiichi Yamanaka
雑誌名	dialogos
号	11
ページ	21-46
発行年	2011-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005051/

二つの日本語論

山中 桂一

ここでは二つの日本語論を点検する。ひとつは言語に関する知見から示唆を得た壮大な認識論の一節、もう一方は日本人と接触するさいの心得として書かれた手引きで、ほんらい同じ平面で取りあげるべき文章ではないかも知れない。じっさい、独創性の違いは明らかで、ウォーフは日本語における二重主語構文を事象の分析方法として普遍的価値をもちうるものと受け取り、他方ルイスは日本語にあって欧米人の目に奇異にうつるはずの特徴だけを選別し、それらが無批判的に日本の文化ないし社会に帰する。

唯一の共通点は、ともにひとつの言語の構造的な特色を取りあげていることで、その点では言語の一タイプとしての日本語にかかわる発言である。ただし、ウォーフの文章は、まだ比較文法からサピアに至る形態的類型論か、あるいはバイイ (Bally 1913) やマテシウス (Mathesius 1926) などの言語文体論 (ないし言語性格論) しか存在しなかった時代に書かれており、他方、ルイスの日本語論は言語事実の百科全書的な収集には厚いものの純理的な考察に薄い。そのためここでの記述・検討はどうしても批判的にならざるを得ない。けれどもその過程で、言語の類型論的な特質についてグリーンバーグの語順類型論にどれほど多くの負債をわれわれが負っているかも明らかになるだろう。

I ウォーフの日本語論

ベンジャミン L. ウォーフという名前は、その名が冠せられた「サピア・ウォーフの仮説」によって広く知られているが、そのかれが日本語を論じた短い文章がある。書かれたのは 1942 年、日中戦争のさなか、ちょうど日本

が国際社会において孤立を深めていた時期である。日本政府の対外的なやり口を見ているとどうい日本人を同朋として遇することはできそうにないが、日本語を審美的・科学的に眺めてゆくとその印象はがらりと変わる。これこそ人間精神が根底において繋がっていることを偏見抜きに知る最良の方法だ。こう書いたのち、かれはつぎのような観察を加える。

この言語の面白い構造のひとつは、文に資格の異なる二つの「主語」がありうるということである。われわれは英語の動詞に対して近接した目的語ともっと遠い目的語、ふつう直接目的語、間接目的語と呼ばれる二種類の「目的語」があるということはよく知っている。しかし、これに似た発想を主語にも当てはめる可能性についてはおそらく思ってみたこともないであろう。日本語ではこの発想が効を奏しており、二つの主語一かりにこれを主語1、主語2と呼ぶことにする一が助詞「は」と「が」によって標示されて、図示するなら、英語の文では一つだけの主語から動詞へ一本の線が延びているのに対して、それぞれの主語から線が延びて2本の線が同じ述語に収斂するのである。その一例は“Japan is mountainous”というときの言い方で、「日本は山が多い」(Japan₁ mountain₂ (are) many; ないし“Japan, in regard to its mountains are many.”)、“John is long-legged”なら「ジョンは脚が長い」(“John₁ leg₂ (are) long.”)となる。

この構文は精確であると同時に簡潔で、われわれの“mountainous”に較べ、同じくらい簡単な方式により“mountainous”の、地域全体の割からいうと数は多くないが高いという意味と、さほど高くない山がたくさんあるという意味を日本人は区別することができる。もしこの構文の力を適切に発展させることができ、論理的に使用すれば日本人が諸概念を科学的に操作するうえで多大な威力を発揮しうることが分かる。(Carroll ed. 1956: 264)

日本語における二重主語構文（「は、が、～」）のこの理解は、時枝が『国語学原論』で図示した捉え方と奇妙に一致しており、なにかの媒介項の存在を窺わせるほどである。ただウォーフは、かれのいう主語₁と主語₂との階層性（下の2, 5を参照）には目が届いていないが、ある主題について、さらに別の近接項をもつ叙述を継ぎ足すこの構文が日本語の基本的な表現形式をなしていることは疑いない。ちなみに、ウォーフによる逐語訳では John₁ leg₂ (are) long のように第一主語と第二主語がいわば等位接続項（*a and b*）のように扱われて、動詞 *are* がそれに一致している点に興味をそそる。つまり「数の一致」という統語的制約が日本語にはないので二重主語という緩やかな組立てが可能になっているのである。付け加えるまでもなく

(1) 日本は 山が多い～？日本の山は 多い

(2) 山は 日本が多い

(3) There are many mountains in Japan.

Japan has many mountains.

(4) 太郎は 脚が長い～太郎の脚は 長い

(5) 脚は 太郎が長い

(6) John has long legs.

John's legs are long.

*There are long legs with John.

などの別形から明らかなように、言語における表現様式を固定的・命令的に捉えることはできず、しかも可能な選択肢の中からどれかを選ぶさいには特有の意味条件がはたらく。たとえばうえの例を見渡しただけでも、存在表現、所有表現、所有物の離接、などの概念構成が交錯しあっており、ウォーフのいう「審美的・科学的な考察」が個別的、抽出的な方法によるのではとうてい遂行できないことが明らかである。

しかし、言語学者がいつけん日本人擁護とも受け取れるこのような議論を展開したことには怪訝な気がしないでもない。当時のアメリカに充満していた反日感情が不健全な水準に達していることを懸念して、まったく位相の異なる視点がありうることをひとりの知識人として世間に示したとも受け取れるし、あるいは、かれの主張する言語相対論がひとつの特異な構文に適用されただけだと解釈することもできる。

しかし、そのどちらも正確な理解ではない。ウォーフの発言のなかで、分析の深度そのものより重要なのは、the logical uses of this pattern（この構文の論理的な運用）、concise scientific operation with ideas（簡潔で科学的な概念操作）という辞句をもってかれが何を言おうとしているかという点である。そこを知るには、当の文章がどのような目的で著され、そして二重主語構文への言及がどのような文脈で行なわれているか、という2点を確かめる必要がある。

異例なことに、この文章はまず、インドのタミル州アダヤルに本拠を構える「神智学協会」(Theosophical Society)の協会員に向けた講演として発表され(1941)、翌年その機関誌に掲載された。一般の目に触れるようになったのは、かれの『選集』が出版された1957年のことである。

冒頭でかれは、「わたしが神智学のみなさんの前でこの問題を掘り下げてみようとするのは、神智学の教説をいちいち確認ないし肯定するがためではありません。むしろこれまでにわたしが接してきたグループのなかで、協会員のみなさんがもっとも思想、とくに新しい思想に感応する能力を備えていると思えるからです」と述べる。かれはその新しい思想にあえて名前を与えず、ただ、言語のなかに未知なるもの、形而を超えたより広大な世界がひそむという予感について語ろうとする。

その予感は、ひとつには言語というものがものごとの表層を記号化し、情報を伝えるだけで充分であり、ことの本質について何も語らないという認識から来る。ひとは言語を日常の道具として自在に操っていても、ふつう、そ

の裏に確固たる構造的基盤がひそむことに気づくことはなく、たとえば語を構成するさいの音素の配列式¹や、語句の結合規則について何も知らない。第二には、小さい単位が組み合わさってより大きな単位を構成し、それがさらに上位の単位を構成してゆく統合過程の存在についても無知である。言語におけるこうしたレベルの重層性についてもうひとつ重要な点は、音声は語を手がかりに認識され、語の指事や意味は文と文の構造とによって左右される、つまり上位のレベルが下位のレベルを支配するという事実である。これらの観察はどちらも言語学の知見から出ているが、ここからすでに、未知なるものの存在と、言語的秩序の階層性 (hierarchy) というふたつの重要な帰結、いいかえればウォーフのいう「予感」のたねが導かれる。

しかしこの言語のしくみ、言語学の知見が教えるところは、単に言語の領域だけにとどまらないうォーフは考える。宇宙の秩序も言語と同じようにやはり連続性、階層性を備えており、現前相、科学的認識の相、さらにそこを超越した包括的論理が順次階層をなしている可能性が高い、とかれは述べる。「ちょうど言語がばらばらの分節的記号化と構造的秩序との二層から成り立っており、そして後者がより包括的な背景をなしているのと同じように、物理世界も、個々別々に対象を取りあげて見るのでは十分に理解することができず、実際はむしろ構造と秩序の複合体をなすような諸原因の場からたち現れる、見た目には離散的な実体 (原子、結晶、生命体、惑星、恒星、その他) の集まりではないだろうか」(Op. cit., 269)。しかし現代の科学はまだそのことを知らず、断片化された認識、異なる相の混同に陥っているように見える。なぜなら、現代文明の先導役をなしている科学そのものが、たまたま西洋諸言語の提供する諸範疇や世界認識に縛られているために、いわば「裏口から家に這入り込んだにもかかわらず、理性の実体と見誤られている」(Carroll ed. 1956: 246) からである。

1 Whorf は論文、「精密科学としての言語学」(1940)で英語(中西部アメリカ標準英語)における1音節語の構造式を発表しており(Carroll ed. 1956: 223)、その簡略表記を取り上げつついまの議論を展開している。

人間の思考は、否応なしに自分では意識することのない記号化 (lexation) の法則によって支配される。言語はそれぞれほかとは異なる辞項の体系であり、個人はそれを用いて伝達を行なうだけでなく、それによって自然界を分析し、種々の関係や現象のタイプを認識したり切り捨てたりしながら論理を組み立て、そして当の個人の意識の館を構築する。たとえば英語の“sky”という名詞は“the sky”, “a sky”, “skies”, “some skies”, “piece of sky”などの形で用いられ、ただ視覚的な影でしかないものを区画のかなりはっきりした固形物同然のものとして、まるで一枚の「板」であるかのように扱う。また文法上、動詞のまえに行為者を立てることが要求されるので、光を見れば、どうしてもつぎのように行為“flash”を行なう動作主として it あるいは a light を立てねばならず、それゆえに自然現象の世界に虚構を読み込む。

(7) It flashed.

(8) A light flashed.

しかし光も光ることも同じで、何者かが何かを行なうわけでも、何かの行為があるわけでもない。言語的機制が異なれば、たとえばホビ語のように主語のない動詞を使ってただ“Rehpi”のような言い方もできるのである²。言語をとり替えれば、われわれの宇宙観も変わる。

2 ちなみに、日本語でも主語ぬきで「光った」のようにいえる。しかしウォーフの論法だと、そこにも動詞化、すなわち現象ないし運動の存在と、過去時制、すなわち現在時との対比という二つの仮構が働いている。言語や概念におけるこのような虚構性に目を向けたのはもちろんウォーフが最初ではなく、いわゆる「普遍文法」論議のなかに長い歴史がある。なかでも法哲学者 J. ベンサムは、言語が成り立つために虚構性が不可欠であることを認めたうえで、法、科学、形而上学、諸制度における言語および概念の虚構性を範疇的に割り出そうとした。かれはとくに「品詞」の恣意性・虚構性に対する疑義から出発して言語批判をくりひろげ、言語の運用をできるかぎり知覚可能な実体—典型的には具体名詞—に引きよせるという基本原則に到達した。すぐ予想できるように、とくに動詞が虚構的で意味が不安定であるとして批判の標的にされたが、かれの場合には用具として使用言語の確度を高めてゆくことが主目的で、中国語にひとつの極点を見ていたことを除けば対照論的な視点はない (cf. Ogden ed., 1932)

現代科学の根底にあるこの種の「言語的」偏向に気づかせ、それを相対化するために、ウォーフは現代科学の定式化とは縁遠い諸言語の仕組みを証例として挙げている。英語と違い、先行詞を一義的に特定できる代名詞の体系をもつ北米のアルゴンキン諸語、結果ないし心的影響をいまに残す過去と、単純な過去とを区別し、時間に対する新しい見方を教えてくれる東アフリカのチチェワ語。われわれは異質なものから新たな認識のしかたを学ぶうるのであり、

外面上とうてい魅力的とはいいがたい人たちや文化でも、ひとたびその言語を科学的に、偏見抜きで調べてゆくと、西洋インドヨーロッパ系の諸言語や心性がついぞ知らなかった、垢抜けていて効果的、科学的な表現上の仕組みが見つかる。(Carroll ed. 1956: 265)

日本語の二重主語は、じつは、このような文脈のなかで取り上げられている。それゆえ、かれが「論理的な運用」「科学的な概念操作」と呼んだものは、自然言語の備える異質・多様な論理的分析の方式、概念を操作するためのさまざまな仕組みの〈認識論的な価値〉に触れているのであり、日本人に対する肩入れとはまったく次元が異なる。

ウォーフの唱えた学説は、原理的に、(a) ひとば言語化された事態やものごとについてしか考えることができない、とする言語決定論と、(b) 文化は概して言語によって規定されており、異なる文化は異なるしかたで世界を認識する、という言語相対論との二段からなるとふつつ受けとられている。しかしうえのような議論を辿ってくると、かれの相対論はさらに、(c) 個々の言語に縛られたものとしての「論理的」分析システム、いってよければ世界観は、それぞれ対等であり互いに相補的な価値を持ちうる、という強い随伴を伴っていることが分かる。そしてそれは、伝達的手段である言語、ないし、もっと一般的にいえば記号体系の対等・平等という主張だけにとどまら

ない。なぜなら、この視点は同じ記号化を行なう、人類すべての平等という感覚と結びつき、ひとはみな同朋という、かれの唱える人道主義につながるからである。言語の分析のもたらしうるそうした認識論的な価値を活かしてゆくことが、西洋言語中心的な科学文明の行きづまりを打開する有力な方策であるとかれは考える。

こうした独立対等な言語文化を熟成し、言語の使用や獲得、言語能力を司る、さらに高次の論理、高次の精神をウォーフは言語集団それぞれの「超自我」(super ego)と呼ぼうとしているが、言語の示唆するこの三段階、とくに第三の超越的なレベルがウォーフの「予感」の核心であり、それには確かな証拠があるとかれは主張する。このような観点は西洋科学にとっては全く馴染みがないけれども、インドの諸思想と神智学にとっては未知のことではなかった。神智学協会の有力メンバーであったウォーフは (Lee 1996: 9, Algeo 2010)、その協会において、言語研究の示唆するこの高次の段階に関するみずからの確信を語り、ついでその三段階を自然界および精神界にそれぞれ当てはめて、ひとつの世界像を打ちたてる可能性を示唆する。

その三段階をウォーフは、インド古来の *manas* 論の用語 *nāma* (名立て)、*rūpa* (規則性)、*arūpa* (普遍原理) を借りて説明している。「ひとはみな同朋」という標語すら、“the brotherhood of the Sons of Manas” ということばで語られる (Carroll ed., 1956: 263)。この *arūpa* の段階の存在証明、当の三段階を物神両世界に当てはめてゆく作業が十分に成功しているとは思われないが、強い共感をもってこれを迎える論者もある。しかしこの問題に立ち入ることは本稿の範囲を大きくはずれるので他書にゆずり (たとえば Lee 1996: 37-42 を参照)、ここでは、通説とは違ってかれの学説が言語決定論とは無縁であるという点を指摘しておくだけにとどめる。もし、「ひとは、語り得ぬものについてひとは黙さねばならない」、あるいは「言語の限界が世界の限界である」という警句が決定論の極点であるとしたら、ウォーフはこれとは逆に、言語を脱ぎ捨てたはてに知の実相が姿を現わすことを論証しようと

しているのである（決定論のべつの側面については後述）。

Ⅱ ルイスの日本語論

もうひとつの日本語論としてイギリスの言語学者リチャード・ルイスによる解説を取り上げる³。この著者はウォーフの主張を前提として議論を進めているが、そこには言語が行動を左右する、言語は社会を反映するという著者独自の拡大解釈がはいりこみ、また「完全に」「しばしば」「たいてい」などの誇張や限定が散りばめられて学術的な記述の水準を充たしていると言にくい。だが、いまはその点は問わない。むしろ大いに興味を唆られるのは、その経験的観察に奇妙に正鵠を得た部分があり、日本語の性格を考えるうえで有益であると考えられる点である。

日本人の行動はかれらの言語の性格によって強く影響されている。ベンジャミン・ウォーフの説によれば、われわれの話す言葉は大幅にわれわれの考え方を決定する。日本人はわれわれ他の人間とはまったく違った方法で言語を使用している。日本語はしばしば曖昧もしくは多義的な言葉と言われており、たとえば動詞が非人称的であるため、誰のことを指しているのか分からないことが少なくない。日本人話者は丁寧さを表わしたり、あるいはひとに迷惑を掛けまいとしてこの曖昧さをしばしば意図的に利用する。ひとのよく知る日本語の敬語はこの丁寧さを高めているが、他面で曖昧さを助長することもしばしばである。たいてい、長い遠回しの前置きが本題のまえに置かれる。何事も日本ではその場にふさわしくなければならず、従って素っ気ない言い方は短かすぎて場違いである。日本人の上役は、「職場をきれいにしろ」とは誰も言わないで、部下に対しては「12 時に大事なお客さんがあるけれど、うちの会社に好印象をもって戴きたいので、

3 著者紹介によれば、これは異文化および外国語にかかわる国際研修所を拠点に、国際企業や政府省庁のコンサルタントを務めている人物のようである。

その辺をもうすこしきちんと整頓しといたらどうだろう」というふうに言わなければならないのである。日本語が日本の社会を反映している点は、日本語には話法の仕組み (reported speech mechanism) がないことである。日本人は正確に伝えなければひとに迷惑を掛けたり困らせたりすることを心配して、他人のことばを取り次ぐのを嫌がる。日本で私のところにいた秘書は、留守中に掛かった電話の内容を伝えることを拒んで、いつも私に電話を掛け直して用向きを尋ねさせた。(Lewis 1996: 401-402)

ほぼ箇条書きに近い文章であるが、主要な論点はつぎの五つである：

(a) 日本語は曖昧ないし多義的である

- ・この性質はしばしば相手への慮ばかり・丁重意識のために意図的に利用される
- ・表現を丁寧にするのに敬語が使用されるが、これは曖昧さを助長する場合もある

(b) 日本語の動詞は非人称的で、誰をさすか明示しない

(c) 本題のまえに長い前置きがくる

(d) 日本語を使用するにはつねに場をわきまえねばならない

(e) 日本語には話法のしくみがない

ここには日本語の性格について文法範疇、文法特性および、談話構成など雑多な問題が取りあげられている。包括的に見ると、しかしすべては日本語の語順特性とその帰結に関わっていると言える。著者は言語事象の大本を見のがして強引にウォーフの学説に結びつけてしまうために、それ自体では正しい観察事項も、単に奇異な現象として互いに無関連のまま放置されてしまうのである。ウォーフのことばを使っていえば、これらはまだ経験知として科学的認識の一步でまえに立ち止まっているうえ、誤認や暴論も観察される。

語順類型論の明らかにしたところによれば、日本語のように SOV 語順をとる言語は、英語のような SVO 型、あるいはアラビア語などの VSO 型と大きく違い、西洋の諸言語に見られる、いわゆる主述関係とはべつの文法構造をもつことが多い。

もっと特定していうと、この語順は主題優勢型かまたは能格型の言語の充分条件をなしており、主題優勢型の言語である日本語には、したがって、文法上「主語」が存在せず、文は主題＋述定というかたちで構成される。そのせいで項それぞれの役割、いわゆる文法格も西洋諸語のものに類似はしているが同じではなく、もっぱら文中での項のかずと配置によって文脈的に決まる。日本語の統語原理についてさらに具体的にいうと、従来“格”標識と見なされてきた(「が」)「を」「に」などにそのじつ内在的な格標示機能は伴っていないと考えられ、“格”の標示機能という点からいえば、辛うじて「を」の役割がそれに近い⁴。日本語のこのような基本特性をふまえつつルイスの目に映った事象を点検してゆくと、それぞれの指摘がより根本的な問題に帰着することが明らかになってくる。

日本が曖昧であるという発言を取りあげてみる。この議論はしきりに行なわれるが、それ自体、あまり厳密な言い方ではない。たいていそれは、日本語に同音異義語が多い、という語彙上の問題と、上述のような統語特性のせいで格関係が明示されないことから来る構造的な多義とのどちらか、あるいはその双方を指した印象論である。「日本語の〈コーコー〉には 40 通りの意味がある」というところから一般化を行なえば前者になり、ルイスのように、

4 日本語における格助詞の認定については諸説がある。小泉(2007: 72)はさまざまな説を検討した結果、主題格「は」、主格「が」、対格「を」、位置格「に」、起点格「から」、着点格「へ」、具格「で」、共格「と」、比格「より」、到格「まで」、属格「の」の 11 格を認めている。これはほぼ通説に近いけれども、ここではべつの立場から「が」「を」「に」の三つを形式的な文法格とし、「から」「へ」「で」「と」「より」「まで」は内在的な意味をもつ場所格、「は」は係り助詞、「の」は句内部において名詞と名詞の関係を表わす「準文法格」と見なして議論を進める。用語上は「格」ということばを踏襲するけれども、それぞれの格の機能は日本語特有であり、これを西洋語の格機能を基準にして理解すべきでないことは言うまでもない。

「動詞が誰について述べているか分からない」という点から一般化を行なえば後者になる。前者は多かれ少なかれどの言語にも見られ、後者は、主題優勢型の諸言語に共通する特徴である（これにも言語により差がともなう）。ときおり聞く「水が飲みたい」は「水を飲みたい」というべきではないか、という素朴論は日本語特有の「分析システム」と論理感覚とのずれが表面化してくる一例である。つぎのような類例もそこに関係しており、主/客の関係は両義的である。

(7) あのひとには話することがない

(8) ウルグアイは気をつけなければいけませんね

[日本チームはウルグアイに／ウルグアイは～にの二義]

(9) あのひとは僕が嫌いだ

助詞を適切に使用すれば一意の統語関係を表わすことも出来ないではないが、概してわれわれは構造的多義に無頓着なようである。そうでなければ、たとえば「田一枚 植えて立ち去る 柳かな」(芭蕉)という俳句がひとつの作品として通用する道理があるはずがなかろう。⁵

ところで上例のほとんどに助詞「は」が絡んでいるが、この助詞は主語ないし主格の文法標識ではないために、動詞は一致の対象をもつことができない。そのせいで、ルイスのいうとおり非人称的であり、日本語における主題と動詞との関係はたとえば英語に翻訳することのできない特殊な関係である。そのことはウォーフによる説明文(10)で奇妙なねじれが生じていること(動詞 are は Japan に一致せず、“論理的に” mountains に一致している)、

5 これの句意はしばしば問題にされ、実際、植えたのは誰か(早乙女／芭蕉／柳?)、立ち去ったのは誰か(早乙女／芭蕉／柳?)については、早乙女が植えて、芭蕉が立ち去る(大島蓼多)、芭蕉が植えて、芭蕉が立ち去る(尾形 汎)、早乙女が植えて、早乙女が立ち去る(久富哲雄)、柳が植えて、柳が立ち去る(平井照敏)などの異解がある(川本ほか編 1997: 72)。

あるいは「は」を as for によって訳すという日本語初学者の便法 (11) が万能でなく、(12) のように“非論理的な”表現を生むことによって確かめられる。

(10) Japan, in regard to its mountains are many.

(11) As for Japan, mountains are many.

(12) ?As for sushi, *Ginza is delicious*. (「すしは銀座がうまい」の訳として)

この統語特性に加え、日本語では主題の省略にかかわる運用ルールがあり、無主題文がきわめて多くなる。たとえば文章語の場合、一人称単数は一般に省略される、初出の名詞項は「が」によって標示されるが再出以降は概して省略される、などの慣用法が行なわれている。また性、数、人称などの文法範疇がほとんど皆無に近く、いわば曖昧防止装置が不備である点是否定できない。こうして文法関係、省略された項、所有関係など、多くの情報が受け手の推測にまかされるので、そのぶん外国人の目に曖昧の印象を与える面が多くなる (Hinds 1986: 40-47; 82-90)。これは憶測の域を出ないが、たとえばつぎのような代名詞化のありかたを較べてみても、英語が表現レベルで文法的照応を完結させるのに対して、日本語では言外の了解事項をそのなかに取り込むことが許容されており、文法の基盤のうえでも若干ずれがあるように思われる。

(13) まずボウルに卵 2 個を割りいれます。大さじ 2 杯のミルクと塩胡椒少々を加え、それをフォークでよくかき混ぜてください。

(14) First, crack two eggs into a bowl. Add two tablespoons of milk and a little salt and pepper. Beat *the mixture* well with a fork.

英語の場合、指示代名詞 it でさす名詞が文中にないので、その、混ぜた

もの (the mixture) として二次的な指示の方法を採らざるを得ないけれども、日本語の「それ」は受け手の心的表象に過ぎないものを指してもおかしくない。日本語と英語とでは、言語の領分が根底において異なることを証拠立てていると言えないであろうか。

もとの論点に戻ると、しかし、敬語が日本語の曖昧さを助長しているという発言は正しくなく、事実は明らかにその逆である。話し手と話中の素材との関係もしくは対人関係、動詞と関与者との関係に微細な区別をつける日本語の敬語システムは、伝達レベルでは文法的一致を代行しており、「誰について述べているか」を特定するヒントを語彙・統語両面で提供している。たとえば「崩御」「薨去」「卒去」「遷化」「逝去」「死去」などの語は、その知的意思は同じものの、日本社会における縦の秩序を細かく指定しており、使用上の規則に縛られている。その点で敬語、性差語、授受表現、あるいは一般に役割語（たとえば「わたし」「ぼく」「おいら」）などは、数や人称とは別種の“文法範疇”として照応・指示関係の確立に奉仕しており、われわれはそこからの情報によって「誰について述べているか」ほぼ正確に把握することができる。

場をわきまえてことばを使わなくてはならない (=d) という指摘もおそらくここに関係している。挙げられた例は、たとえ部下に対してでも非常に丁寧に間接的な表現が使われるという事実をおもしろおかしく誇張した形跡があるが、丁寧な表現への志向は言語の別にかかわらず見られ、ことばというより心性に関わる普遍傾向である。これを理論的に分析・説明する試みもすでにいくつかあり、丁寧表現にかかわる種々の「方略」や「修辞的画術」は微細に検討されている。たとえばうえの例も、「誇張せよ」「共通の利害に訴えよ」「常套的な遠回し表現を用いよ」、その他の方略によって成り立っていることは明らかで、べつに日本語だけに固有の現象というわけではない (Brown & Levinson 1978: 103ff.)。日本語に特徴的なのは、その丁寧表現の中核に敬語システムが語彙化・統語化されて組み込まれている点で、ここを

指して、その場にふさわしい言葉づかいが求められると述べているのであれば、それは否定できない。またそれが「日本人社会の反映である」という観察も正しい。

日本語の動詞はたしかに非人称的 (impersonal) で、代名詞のレベルでも動詞の活用のレベルでも人称という範疇が欠如している (= b)。しかし人称をもたない理由もうえに述べた言語タイプから自明であろう。日本語では西洋諸語における主語＋述語という関係が文の恒常的なかたちでなく、等位文「AはBである」に典型的に見られように、それ以外のもろもろの意味関係を包摂しており、西洋語の主述と同じ関係は項の配置によってたまたま成立するにすぎない。言いかえれば、日本語の動詞は、そもそも人称（あるいはさらに数や性）を恒常的な範疇として備える条件下にないのである。

日本語に話法の仕組みがない (= e) という発言は目新しく、またこのような欠性特徴に目がとどいた点でこの著者の言語感覚はなかなか鋭い。しかしこの場合も、英語の話法（なかでもとくに間接話法）に相当する仕組みに欠けている、という意味で、観察そのものは正しいものの、それがやはり語順タイプから生じる必然の結果であること、それに代わる装置が備わっていることに気づいていない点で、日本語について有意味な指摘とはなっていない。英語に似た話法上の決まりがないことは確かであるが、それに代わるものとして動詞「言った」「聞いた」、助動詞「終止形＋そうだ」、複合助詞「終止形＋のだって」など伝聞を表現する装置はふんだんにある。

それゆえ肝心な点は伝聞表現の有無ではなくて、日本語の伝聞表現がすべて引用された発言に後続するという特徴である。これもやはり基本語順のタイプから来ており、日本語とたとえば英語との違いはつぎのように表示できる。

(15) 太郎は“大丈夫だよ”と言った。 (S - “Quote” - V)

(16) Jack said, “Never mind”. (S - V - “Quote”)

- (17) "Never mind," said Jack. ("Quote" - V - S)
 (18) "Never mind," Jack said. ("Quote" - S - V)

英語における話法の骨子は、間接話法において本動詞の時制が後続する引用文内のダイクシス（時制、代名詞、および時や場所の副詞など境遇性のある辞項）を支配するということである。可能性としてこれは主節の動詞が従属節を支配するとも、発話連鎖の線上で先行要素が後続要素を支配するとも解釈できる。しかし間接話法において、引用されたことは内容によって（たとえば一般真理を表しているような場合）その制約は緩められることがあり、また(17-18)のような文章語では間接話法が成立しえないので、いまいち支配とは先行要素による後続要素の支配であると考えられる。間接話法におけるダイクシスの変換は動詞が目的語に先行する言語（SVO, VSO, VOS）に見られる現象で、そうでない言語（SOV, OVS, OSV）ないし文体では起こらないと結論できそうである。言いかえれば、この語順上の特徴と時制の一致とが必要条件であることになる。（たとえば中国語はSVO語順であるが、時制の一致が存在せず連続動詞という別の処理法をもつので、話法の転換を起こさない。）英語には構造的に支配の条件が二つともそろっておりダイクシス変換が要求されるのに対して、日本語にはその必要がないのである。

本題のまえに長い前置きがくる（＝c）という指摘は、他の4点とは違って、言語の構造でなく日本人に特徴的な談話の構造にかかわっている。

Ⅲ 日本語論の起点

冒頭で見たウォーフの断章は大きな理論的構想のなかに現われたものであり、そこだけ取り出して論評するわけに行かなかったが、純粹に言語論上の観察として受け取ると、かれの論点は、つぎのようにまとめられる。

- ① ある言語や言語グループ特有の文法範疇や構文は世界を分析するため

の仮説的な枠組みである

- ② それらは、人間の超自我の産物としていずれも対等である
- ③ それらのさまざまな枠組み、言ってよければ仮説は、特定の認識様態に対する適合性という角度から評価することができる、
- ④ 世界はたいてい無意識のうちに言語の組織をとおして認識される

ここには相互に関連のないいくつかの論点がふくまれている。

議論の起点をなす、言語はそれぞれ独自のしかたで経験世界を分析する、という第一の命題が、たとえばイエムスレウの定式化 (1943 [1953]: 54) に先駆けて、語彙レベルを超え、文法範疇および統語構造までも含めた議論に到達していた点は高く評価されるべきであるが、それ自体は言語事実の公平な観察であって現在では広く共有されている見方であろう。これにつづく、分析のそれぞれの方式は互いに対等である、という命題は、超自我を想定する点では独自の見解を含んでいるものの、言語の優劣を問うことはできないと考えることはいまでは言語論の通念であり、ここに問題とする箇所はない。

したがってウォーフの所説を見渡したとき、第三の命題と、かれの主張のうちでもっともよく知られた④が文字どおりウォーフの「仮説」と呼ぶべきものであり、ふつう理解されているところとは違って二つの側面をもつと考えられる。(Arūpa 説を加えれば三つの側面になる。) しかし最後の仮説④はさまざまな異本のもとに流布しており、まず言語による強制の強さについていろんな見解があり、たとえば並び称されるサピアとウォーフにも多少の差がある (注6を参照)。またその強制が何に及ぶかについても用語が一致しておらず、「精神」や「思考」「認識」「行動」など、さまざまに言い表わされており、サピア・ウォーフ仮説の複合体といった観を呈している。しかし、サピアのいう「言語習慣」もウォーフの、「世界は、われわれの精神によって編成されるべきさまざまな印象の万華鏡で見るようなちらつき」⁶も

6 かれの論文“Science and Linguistics” (1940) に見える、(1) The world is presented

言語による分切という解釈項をとおして見れば自明であり、未分切・無規定の経験世界が、言語の機制によってはじめて輪郭を現わす、という主旨であることは自明である。イエムスレウが、無定型の「素材 (purport) に対し、それとは別種の、恣意的な関係にある内容の形式 (content-form) を与え」(Hjelmslev 1953: 52) 記号として取り出す、と述べたのと同じプロセスをこう表現しているに過ぎない。したがってこの見方は、ひとには言語に先立って世界を分切する能力がある、という立場にのみ対立し、ゆえに、それ以外の立場からする批判はすべて無効である。

そうした言語の強制が何に及ぶか、という点については、それが思考であれ認識であれ行動であれ、すべてに妥当する。「義理」という日本語の辞項ないし概念をもつゆえわれわれはその強制を受けた行動をとる。敬語が文法範疇として日本語に組み込まれているせいでわれわれは、ルイスが指摘しているように、話し手は自分をその場にふさわしい立場に位置づけなくてはならない。場所がらをわきまえるという日本的な礼節の教条は大本をただせばそこに帰着するだろう。概念的な隠喩が価値観を生み出し、われわれはそれらの指定するように「生きようとする」というのも同じ主旨の立論である (cf. Lakoff & Johnson 1980: 21-23)。

したがってこの仮説は一般論として十分な妥当性を備えていると考えられる。じっさい世に流通している文化論の多くは、ある言語の特徴をなす項目、すなわち過剰分切や他言語に翻訳しにくい語彙や文法項目を目安として組み立てられており、これは明言するしないにかかわらずウォーフ説を実践

in a kaleidoscopic flux of impressions which has to be organized by our minds – and this means largely by the linguistic systems in our minds. (Carroll ed., 1956: 213) の試訳。この見解と、サピアの (2) Human beings do not live in the objective world alone, nor alone in the world of social activity as ordinarily understood, but are very much at the mercy of the particular language which has become the medium of expression for their society. (3) [T]he ‘real world’ is to a large extent unconsciously built upon the language habits of the group. (Sapir 1929: 69) という発言を掲ぎ合わせたものがいわゆる「サピア・ウォーフの仮説」の実体である。

していることになる。つまり、この仮説自体の正しさを問うというより、その個別的な適用においてのみ真偽が問われるべき段階にある。たとえば「さすが、やはり、～だけに」などの翻訳不能な辞項を手がかりに、日本人には一定の期待水準を設けてものごとの価値を判断する傾向があると結論するとき（板坂 1971）、その発言はひとつの概念領域に関わっており、そのために充分説得力があるように感じる。これとは逆に、「フランス語は数を勘定できないことばだから、国際語として失格している」（石原 2004）という発言は、逆に一部の語構成だけを取りあげた悪しき適用の例である。日本語には話法の仕組みがないので、自分のところにいた日本人秘書は伝言のとりつぎを嫌がった、という一般化もここに加えて良いと思われる。

しかしいまの文脈に直接関連するのは、第三の論点である。この命題を裏づけるためにウォーフは、日本語の二重主語構文が属性の論理的記述にとって有力である、あるいは西洋諸言語の分節方式でなく、現象の総体をそのまま不可分の運動として捉えるアルゴンキン諸語の解法が事象の把握に虚構を持ちこまない点で勝れている、あるいはまた、原子物理学の到達した宇宙観と整合する、その他、いくつかの例をとりあげている。この主張が言語の平等をいう②からの帰結であることは確実であるが、しかしその主旨はかならずしもはっきりしない。ある言語に見られる分析あるいはコード化方式が、とくに優れた面をもつ場合がある、とはいったいどのような主張であろうか。

優劣の判断がどのような角度からなされているのか点検してみると、第一の特徴は、ある言語の総体でなく、ある言語に局所的に見られる「分析法」が取りあげられている点である。日本語という言語が論理に適っているのではなくて、日本語における二重主語構文が属性の的確で論理的な表現に適しているのである。いうまでもなく、この微視的な視点は、言語が互いに平等であるとする立場と矛盾することなく成立する。

第二に、判断の基準として、たとえば物理学や論理学などの現代科学の知見に合致している、解法が的確である、あるいは虚構の夾雑を免れている、

など、積極面と消極面とにわたって種々の性質が取りあげられている。したがってこの基準の性格が問題にされなくてはならないが、客観的に見てこれらの基準には、せいぜいで自然言語、とくにもろもろの弱小言語が到達した処理法のなかにも西洋文明から見て驚くべき視点が潜んでいる、といったていどの意味あいしかないように思われる。日本語（その他）における二重主語構文の場合、あるいはその主題部が記号論理学の採用する冠頭符（ $\forall x$ 、 $\exists x$ ）に近似していることから論理性があると判断されたのかも知れず、もしそうであれば、日本語の語順（＝文節順）は逆ポーランド記法に等しく、ゆえに論理的である、あるいは継時的演算に適している、といった議論と大差がない。たとえそうでないとしても、ウォーフが種々の僻地言語に関する観察から導いた、いわば「教訓」が列挙されていることは確かで、もとにあるのは単なる偶然の一致にすぎず、たとえば西アフリカ、ドゴン族の神話がギリシア思想や天文学の知識と符合する、といったたぐいの観察と本質において違わない。端的にいった判断の基準となっているのは西洋と縁遠い文化や言語における「先取り」への驚きであり、それ以上の論拠はどうにも見当らない。中国語の代名詞の三人称 *ta* は性を区別せず、その点では英語が採用しつつある *s/he* と一致するけれども、しかしそれは何も男女同権意識の先取りではない。そのような西洋中心主義がウォーフになかったとしても、言語という、コミュニケーションを目的とした実用の具に科学の先取りがあると見ることから来る驚きがあることは確かであろう。

この仮説③の内容についていうと、論理といい、科学といい、西洋的な知の体系がこうした判断の枠組みをなしている形跡は覆いがたい。これは、西洋科学の限界やそれを待ちうける闇の超克をとなえる（Carroll ed., 1956: 270）うえでは明らかに循環論である。さらにいうと、論理（自然論理も形式論理もともに）も科学もそれぞれ言語の一種であり、これは言い換えれば異国の言語であれ人工の「美しい」体系であれ、それを習得したり作成・運用したりする能力が人間には備わっているということを意味している。まえ

に、ウォーフは言語を超えた次元があることを主張している点で、言語決定論に与していないと述べたが、決定論に対する真の反証はこの言語能力にこそあると言ってよい。いわゆる相対論も日常の言語使用、認識や行動に巣くう慣性という平面だけで通用する議論であり、その中心命題をなす④も、やはりこの能力のもとでは空無化する。論理性や科学性とはべつの平面でわれわれがある言語から他の言語への越境を自在に行ないうることは、“論理的”な語順をもつはずの日本語がありながら、計算では「 x に y を足すと z になる」といわず、「 x 足す y は z 」という数式言語の語順に従っていることから分かる。もとに戻って、この仮説を講演録の説く三段階説に当てはめると、ウォーフの問題意識は、多方言化、相互不通が西洋型言語の専門化である科学思想を侵しつつあるという危機感から出ており (Carroll ed., 1956: 246)、これを自然言語の示す言語知が、を救いうるか、というかたちに言いかえられる。しかし、想像するに、科学の言語も自然言語と同じく特定の領域で特定の目的をもって生み出される記号体系であり、使用者と使用目的の消失による陶太のほかには方言化の進行をとどめる方法はないように思われる。

いうまでもなく、言語を比較・対照しようとするさいに最も重要なのは比較の基盤と尺度である。たとえば語彙面では概念領域が、統語面では語順や意味役割がそのような役目をはたしてきたが、ここで取りあげた二つの日本語性格論ではとくに基本語順と、それが統語操作に課する制約とが大きく関わっていた。結論代わりにいうと、いわゆる語順類型論 (word-order typology) の見いだした諸事実も、この(弱小)言語のしめす叡智という見方を根底から揺がすひとつの要素である。うえで見た日本語論は、各種の言語事象が日本語という特定の言語に固有の特徴であるかのように見なしていた。しかし語順類型論によって、それらの多くは特定の言語というより、特定の言語タイプに共通して見られることが明らかにされた。言語性格論の基盤が個別言語から言語タイプに移行したのである。

グリーンバーク (Greenberg 1963) の開拓した語順類型論はいまでは広く知られていると思われるのでごく簡略に述べるにとどめるが、かれは世界の5地域から系統の考慮なしに30言語を抽出し、文の主要素の順序、いわゆる語順について明らかな偏りがあることを見だし、文レベルでの並び順が句や語の構造と強く相関していることを含意普遍項 ($p \supset q$) のかたちで定式化した。そのごの展開をも含めて、いくつか基本的な事項をあげてみると、

- ① 文の主要3成分 (S, V, O) の配列は算術的に可能な6通りの組み合わせに分散せず、たいていの統計で97%以上の言語が SOV, SVO, VSO の3タイプに集中する⁷
- ② これらの三者には SO という順序、可能でありながらあまり実在しない3タイプには OS という順序が共通しており、それゆえ自然言語には出来ごとの動線をなぞろうとする傾向、いわゆる類像性 (iconicity) の原理が働いていると考えられる
- ③ この基本語順は節や句、形態などにおける語順と強く相関しており、それらの相関関係は含意規則のかたちで定式化できる (たとえば VSO 語順は、名詞+修飾部、名詞+所有格、前置詞+名詞、助動詞+本動詞、補文標識+節、その他の語順と相関する傾向がある)
- ④ SVO 語順と VSO 語順の言語には大差がなく、したがって VO 語順と

7 この、いわゆる他動詞構文だけを抽出・比較したことには理由がある。自動詞構文では二つの可能なタイプ (SV, VS) しかありえず、また二重目的語構文 (SVOO, VSOO) や動補構文 (SVOC, VSOC) が統語構造としてどの言語にも備わっているとは限らない。一般的に言って、語順類型論が言語事実の大幅な単純化から出発しなければならないことは事実で、主語や動詞、形容詞といった範疇があらゆる言語に共通しているわけでもない。また、語順が自由で、基本語順の見分けが付きにくい言語もある。ウオーフはもっぱら北アメリカ先住民の、いわゆる多総合語 (polysynthetic language) を例にとって論を展開したが、それらの言語では語や句などの単位、ひいては品詞を見分けることが難しく、また定まった語順もない。そのためかグリーンバークのサンプルには含まれていない。しかし、最近の研究では、多総合型の言語にも類型論的な分析を適用しうることが指摘されている (Baker 2001: 85-122)。

OV 語順の違いが言語の性格に強く関係しており、たいていの言語はこの二つの基本的なタイプのバリエーションとして成立している

- ⑤ SOV 語順の言語は主題＋叙述型 (Topic-Comment type) かまたは能格型 (Ergative type) に分かれる
- ⑥ 主題＋説述型の言語は二重主語構文をもつ傾向がある、その他

繰り返すと、これらはあくまで含意規則であるので、たとえば二重主語構文が SVO 語順の言語に出現しない、ということを必ずしも意味しない（現に劣勢構文としてロシア語の方言やイタリック系の諸言語に見られる）。便宜的に、うえの主要3タイプをそれぞれ対格型 (SVO, VSO 語順)、主題型 (SO V₁)、および能格型 (SO V₂) と呼ぶことができる。主題型と能格型との分岐条件はいまのところよく分かっていない。

また主題＋叙述構造は自動詞構文、とくに等位文 (A is B) に強く現われるので、他動詞構文の語順との相関性は微妙である。対格型の言語に主題＋叙述構文が現れないとはいいきれず、逆に主題型の言語に対語構造が見られないというわけでもない。たとえば Li & Thompson (1976) は SVO 語順であるにもかかわらず中国語を主題優勢と見なし、日本語は主題・対格混合型と見なしている。

類型論のこの成果に照らして見ると、ウォーフが日本語に固有であるかのように扱った二重主語構文は、そのじつ、SOV という基本語順の随伴のひとつであり、日本語だけの「素晴らしい方式」(lovely pattern) なのではない。したがって文化的な背景をもつわけでも、超自我による発見でもないことになる。同じ含意関係は、その他のいくつかの構造特性についても当てはまり、SOV で、主題が優勢な言語には、たとえば、いわゆる「ウナギ文」の存在（「かれは肺癌だ」「私はビールじゃない」など）、第一主題の第二主題に対する優位性（たとえば日本語における「は」の「が」に対する優位）、形式主語の非在 (It flashed などにおける it に相当するものがない)、受け身形があまり

使用されないかまたは意味上ほかのさまざまな機能をにう傾向がある（たとえば日本語の「られ・る」が受け身だけでなく尊敬や可能、被害などを表わすのにも使用される）など、の特徴があるとされている（Li & Thompson 1976）。

このように、言語類型論は⁸、個々の言語の諸特徴がそのじつ偶有的な偏差にすぎず、その根底に主要素の配列にかかわる普遍項が存在し、それが言語の骨格に、一様にはないものの確かな理由に基づいて、作用していることを次第に明らかにしつつある。むろんそれだからと言って、当の偶有的な部分、すなわち文法範疇や語彙のレベルにおけるコード化の種類や程度、あるいは通時的推移が「社会を反映」し、また特定のコードの常用による“轍”が「行動に影響」するという観点を否定し去るわけではない。けれども、とくに統語構造について、その特性を因果論的もしくは決定論的な視点から解釈しようとする試みが、理論的に掣肘されることは明らかである。

したがってこれからの言語性格論は、ある言語についてその類型論的な性格と偶有的な特性とを明確に見分ける作業から始めなくてはならない。たとえばうえでは、日本人が本題のまえに長い前置きを述べる、というルイスの発言(=c)を談話構造に関わっていると書いてだけで、詳しくは検討しなかった。その理由は、事実の観察としてあながち間違いではないと考えたからであるが、日本人のこの癖は相手への気兼ねというような社会的な行動パターンによって説明されるべきものであろうか、それとも、文章や語りにおける「枕」も含め、たとえば主題＋説述型の言語を常用するからくる習性として説明可能なことがらであらうか。問題の取りあげ方と立証の仕方との両面で、採るべき方針がより明確になってきたことは確かだと思われる。

8 この分野には経験主義と機能主義との険しい対立があるけれども、ここでは、その方法論的な違いを問題にしない（cf. Croft 1990: 3）。

References

- Algeo, John 2010. "A Notable Theosophist: Benjamin Lee Whorf." www.theosophical.org/publications/quest-magazine/1324. Accessed 16 Sept 10.
- Baker, Marc C. 2001. *The Atoms of Language*. New York: Basic Books.
- Bally, Charles 1913. *Le Langage et la vie*. Paris: Droz.
- Brown, Penelope & Stephen C. Levinson 1978. *Politeness: Some Universals in Language Use*. London: Cambridge University Press.
- Carroll, John B. ed. 1956. *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Croft, William 1990. *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenberg, Joseph H. 1963. "Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements," in J.H. Greenberg ed., *Universals of Language*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, 58-90.
- Hinds, John 1986. *Situation vs. Person Focus*. Tokyo: Kurosio Publishing.
- Hjelmslev, Louis 1961 [1943]. *Prolegomena to a Theory of Language*, Tr. Francis J. Whitfield, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. New York & London: University of Chicago Press.
- Lee, Penny 1996. *The Whorf Theory Complex*. Amsterdam: John Benjamins.
- Lewis, Richard D. 1996. *When Cultures Collide*. London: Nicholas Brealey Publishing.
- Li, Charles N. & Sandra A. Thompson, "A New Typology of Language," in Charles N. Li ed., *Subject and Topic*, New York: Academic Press, 458-489.
- Ogden, C.K. ed. 1932. *Bentham's Theory of Fictions*. London: Kegan Paul Reprint.
- Mathesius, Vilém 1928. "On Linguistic Characterology with Illustrations from

Modern English,” *Actes du Premier Congrès International de Linguistes*, 56-63. In Joseph Vachek ed., *A Prague School Reader in Linguistics* (Bloomington: Indiana Univ. Press, 1964), 59-67.

Sapir, Edward 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. 1979 Reprint. London & Toronto: Granada Press.

Whorf, Benjamin Lee. “Language, Mind and Reality.” *Theosophist* 63 (1942): 281-91; 25-37. Reprinted in *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, ed. John B. Carroll (Cambridge, MA: MIT Press, 1956).

板坂 元 1971.『日本人の論理構造』、東京、講談社。

川本皓嗣ほか編 1997.『芭蕉解体新書』、東京、雄山閣出版。

小泉 保 2007.『日本語の格と文型：結合価理論にもとづく新提案』、東京、大修館書店。